

電動怪獣 ゴメスの修理

リモコンの怪獣が来ました。思い出深い「恐竜」だという事です。
相当古いもののようです。

故障は、①スイッチがこわれている。

②動かない。

③右の牙が無い。の3点です。

故障① リモコンの電池ボックス（青い金属製）の赤いスイッチは
留めが外れていただけなので、すぐ治りました。

故障②が大問題です。

観察した所、本体は全体がプラスチック製で、ネジ留めは一切ありません。

左右の半身ずつが、中央で接着されているようです。

顔の中央でも接着されていますから、開けるのは冒険です。

（この作りは一寸不思議です。普通ならば、大切な顔は
一体で作り、首にはめ込むなどしているでしょう）

振ると、チャカチャカと軽い異音がします。

外れた部品か破片が、中で踊っているようです。



この段階で、依頼の方にご相談しました。

かなり古いもので、このままフィギュアとして大切に残す方が
良いのではないかと。開けるには、カッターかのかぎりで切り
開くしかなく、傷が残る恐れがあるだろう…と。

お返事は、「思い出に残っている動く姿を見たい」という事でしたので、
敢えて開ける事になりました。

でも、その前に、この「恐竜」「怪獣」について調べてみました。その結果分かった事は、
元来は円谷プロダクション制作の「ウルトラQ」の、トンネル工事現場に現れる怪獣「ゴメス」
だという事でした。

おもちゃとしては、1966年8月マルサン商店から「電動怪獣ゴメス」という名で、
キットとして売られ、購入後に組み立てたもののようです。

体中央で接着するという、何となく初歩的な作りである事も、これで納得です。

ご家族のどなたかが購入、組み立てて、接着されたものなのでしょう。

よく見ると、接着部分に所々隙間なども見られ、それも頷けます。

ネット情報によれば、青いブリキ製の電池ボックスは、かなり初期のものだそうです。

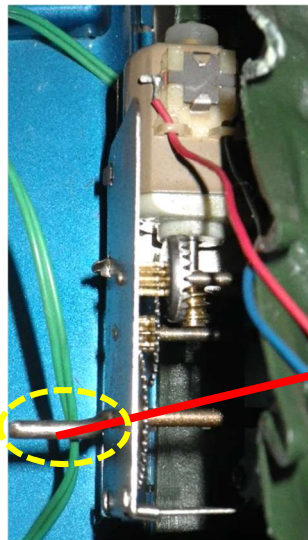
さて、開ける前の最後の試みです。モーターやギヤボックスのあると思われる辺りを目がけて、
隙間からシリコンオイルをスプレー、リード線に少し高め（4.5ボルト）の電圧をかけてみます。
運が良ければ、これで動いてくれるかも知れません。しかし結果はノーでした。

いよいよ切開します。薄刃のピラニアのかぎりで接着面を切って行きます。

接着も古くなっていたのか、恐れていたよりはスムーズに開く事が出来ました。

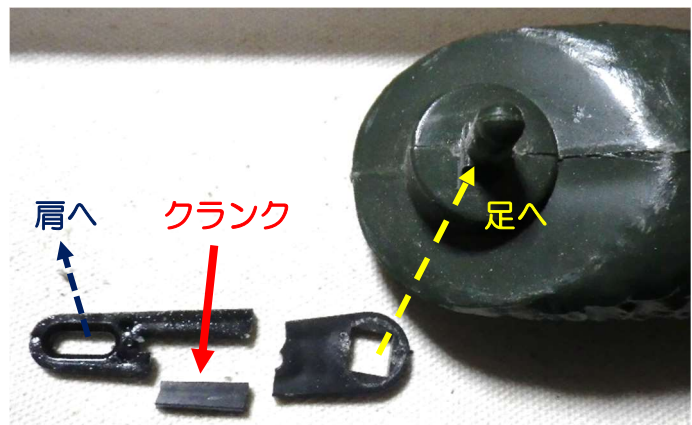


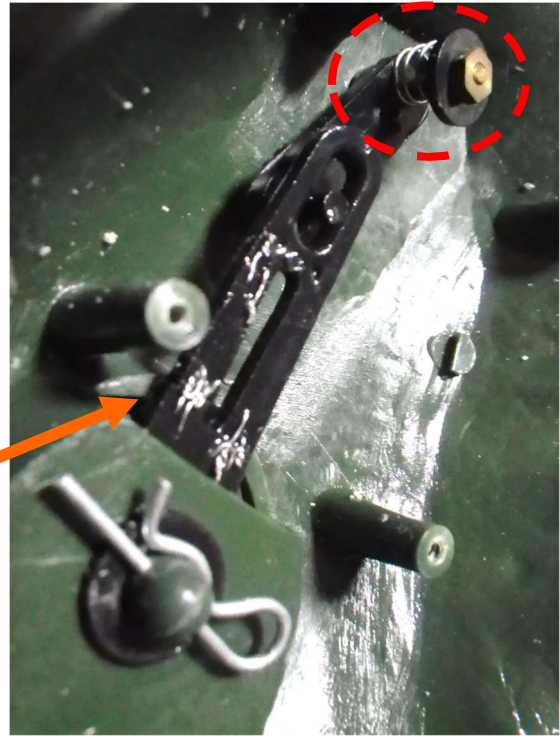
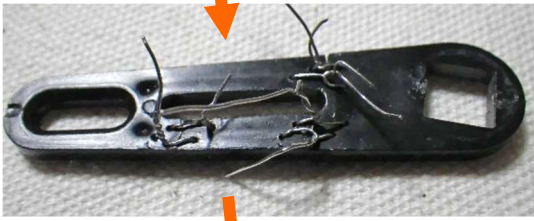
写真左側にモーター・ギヤボックスが見えます。モーターの回転はギヤボックスを経由、クランク（黄点線円）から赤矢印、白丸のように伝えられ、手足を動かす仕組みです。モーターはたっぷり注油した結果、動いてくれました。



そして、異音の正体が分かりました。クランクにつながり、右の手足を動かす為のシャフトが、写真のように破断していました。

このシャフトの修理は、いつものようにステンレス線で結束し、接着剤で固めます。





腕の付け根は、右の写真の赤点円の所で、スプリングで押さえています。左腕はビスが無く、右腕はビスが緩んでグラグラしていました。

ビスを足してかなり強めに締め付け、節度ある動き、クリックストップ出来るようにしました。



故障③ 無くなっていた右側の牙は、割箸の先を削って取り付けました。水性エナメルで似た色を作り、着色します。

両方の脚ともに、がたつきが大きく、シャフトがクランから外れやすいので、上の端に3ミリφのアルミ線を接着して、がたつきを小さくしました。あるいは、この辺がシャフト破断の遠因だったのかも知れません。



接着する前に、輪ゴムで仮押さえして試運転してみました。ヨチヨチ歩きですが、なんとか動いてくれました。腕も自由な角度に止めて、振り動かすことが出来ました。

以上